4. 三・一独立運動を評価する自由社版

日本の支配下の朝鮮では，1919年３月１日，旧国王の葬儀に集まった人々がソウルで独立を宣言し，「独立万歳」を叫んでデモ行進を行った。この動きはたちまち朝鮮全土に広まった（**三・一独立運動**）。朝鮮総督府は武力でこれを鎮圧したが[1]，以後は統治の方針を文化統治（文治）政策に変更し，のちに，日本との一体化を進めていくこととなった。

[1] 最初は非暴力の集会として計画されたが次第に大規模になったため軍隊までが出動したことでかえって衝突がはじまり，民衆に多くの死傷者が出た。日本国内でも吉野作造，宮崎滔天など，「朝鮮民衆の当然の声」として，この運動に理解を示す知識人があった。

朝鮮の三・一独立運動　逮捕された朝鮮の学生。最初は宗教家が呼びかけた非暴力の独立宣言集会だったが，騒乱となって各地にひろがった。

◂**自由社版 p185**

安重根と同様、三・一独立運動の取り上げ方についてもバランスが求められますが、自由社は上の写真のように大きなスペースを割いています（扶桑社版には側注と写真説明はありません）。自由社版の内容は(１)最初は非暴力の集会だった(２)日本側が軍隊を出動させたため衝突が始まり、朝鮮人に多くの死傷者が出た(３)運動に理解を示す日本の知識人がいた(４)その後、日本は統治政策を変更した―というものです。これらの要素をすべて記述しているのは自由社だけです。他の教科書の記述を抜粋します。

三・一独立運動の記述抜粋	
教育出版	日本の植民地とされていた朝鮮では、1919（大正８）年３月１日、京城（今のソウル）などで、朝鮮の独立が宣言され、街頭で「独立万歳」をさけぶ行動がおこり、朝鮮全土に広がりました（三・一独立運動）。この運動は、平和的に非暴力ですすめられましたが、日本は軍隊や警察の力で、これを弾圧しました。これに対し、朝鮮の人々は各地で立ち上がり、独立運動は朝鮮全土、さらに満州などにも広がりました。
東京書籍	三・一独立運動後、日本は言論、出版、集会の自由などを一部認めたり、教育制度を拡充したりするなどの政策も取り入れました。
日本文教出版（旧大阪書籍）	日本国内の民主化を主張した吉野作造は、三・一独立運動に理解を示し、「どの民族にあっても、祖国の回復をはかることは最高の道徳である。」と述べました。

これらの記述を合体すると自由社版の内容となります。自由社は既存教科書の内容を取り入れ、三・一独立運動について最も詳述した教科書になりました。